

山椒魚の句集をきっかけに作者との交流を描く

## 大山椒魚（オオサンショウウオ）〔真庭市〕

はんざきの哀しみ知らず雪が降る 麻実  
 という句が目にとまった。はんざきと哀しみと雪—意外なとりあわせであるが、私の心にはひびくものがあった。はんざきというのは、あの辺の川の上流に棲んでいるオオサンショウウオである。半身を切りとられても死なないしぶとい動物と言われている。私の故郷の村では少なまってはんざけと呼んでいた。作者は、あのグロテスクな動物のどこに哀しみを見いだしたのだろう。



写真提供 真庭市湯原振興局地域振興課

### 大山椒魚（オオサンショウウオ）

オオサンショウウオは、体の表面の「いぼ」から出る粘液が山椒の匂いに似ている（あるいは皮膚の色、形が山椒に似ている）ことから付けられた名だと言われています。また、強壯で、半分に引き裂いても再生するという言い伝えから「ハンザキ」転じて「ハンザケ」とも呼ばれるカエルやイモリと同じ仲間の両生類。その大きさは世界最大級です。

オオサンショウウオの本格的な研究は、明治31年にさかのぼります。東京帝大（現東京大学）農科大学教授の石川千代松博士が湯原を訪れ、綿密な調査の結果、生態や分布の全貌が解明されました。いわばここ湯原は、オオサンショウウオ研究の発祥地とも言えるのです。

### はんざきセンター 〔真庭市豊栄〕

はんざきセンターの玄関を入り左側に進むとオオサンショウウオを飼育している水槽が目の前に現れます。ここでは生きたオオサンショウウオを間近に見ることができます。

湯原はオオサンショウウオ研究発祥の地とも言われており、オオサンショウウオに関する研究資料もならべられていて、自由に閲覧できます。



「はんざきセンターパンフレット」より